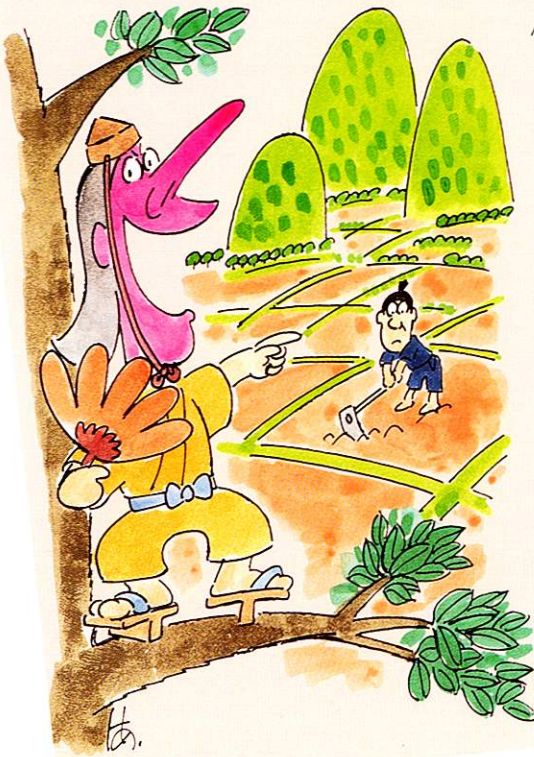


●天狗とお百姓

むかしむかし福生村に甚兵という大そう働き者のお百姓さんが住んでいました。

甚兵さんは日の出と同時に野らへ出かけ大岳山の向こうに夕日が沈むまでもくもくと畑を耕しました。甚兵さんの畑の端には、子ども3人が両手をひろげてやっと届くほどの太いかしの木がありました。いっばいに枝をひろげ、青々とした葉は、甚兵さんが休む時に涼しい木蔭をつくってくれました。一畝一畝ふりおろすたびに真黒な土の塊が掘りおこされ、かわいた畑が生きかえっていきます。汗ぐっしょりかいて一生懸命やっても広い畑は思ったほど耕せません。そんな甚兵さんの姿をかしの木の上から毎日見おろしている天狗がいました。「人間はどうしてあんな馬鹿なことをするんだろ。俺ならあんな四角い物を一度にひっくり返えしてやるものを」。空に星がきらめき始め、静まりかえった畑にゴォーという音をたてて天狗はかしの木から飛びおりました。丸太のような腕で畑の畔をも体から汗が流れるだけです。夜が明け、朝日の中に黒々とひろがきらめいていそいそと山へ帰って行きました。天狗は朝日に笑われ、あられたそうです。

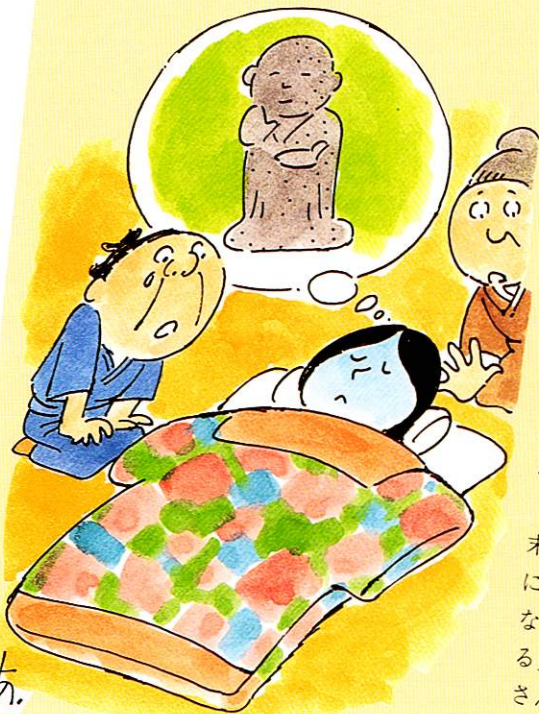


●おその地藏

長沢にある薬師様の前の小さなお堂に二体のお地藏様があります。向かって左側の小さなお地藏様には、何枚もの前かけや着物がかけられています。このお地藏さんは「おその地藏」とか「人助け地藏」と呼ばれ、今もお参りをする人が大へん多く、11月14日のお祭りにはお坊さんにお経をあげてもらい供養しています。

昔は、竹筒の花立てがあってお参りに来る人々が酒や水をあげていました。その水は、目につけると目が良くなるといわれ、目が治ると人々はお礼にどじょうをあげました。お地藏さんの前の、堀川(堂川)にもたくさんどじょうがいましたがどれも片目がつぶれていました。ここのどじょうをとると目がつぶれるとの言いつたえがありました。またこのお地藏さんは、子どもの病気に効きめがあるということでも有名です。

このお地藏様は「おその」と呼ばれています。「おその」さんは幕末の福生長沢に生まれ村山にお嫁に行きましたが、重い病気で実家に帰って来ました。しかし病は重く「私が死んだら、お葬式などしないでお地藏をまつて欲しい。きっとみんなの病気を治してあげる」と言いのこしました。この遺言を耳にしたおいたちは、おそのさんに大層かわいがられていたので、言い付け通り地藏を建てました。それがいつの間にか「おその地藏」と呼ばれるようになり願かけの人がいまも絶えないそうです。





●かしの木とりゅうじん様

大きなかしの木と池が庭にある農家が中福生にありました。池はだいぶ昔に埋められてしまって、かしの木だけが残りました。木の下にはりゅうじん様がまつられていました。ご神体は雌雄の白へびのぬけがらでした。秋の収穫時になるとまわりの農家は自分の庭いっばいに米や麦を干します。ところが、かしの木の陰は長く大きいので、米や麦が良く乾かないで困るとその農家は毎年苦情をいわれていました。一方立派なかしの木を売ってほしいという材木屋さんが何人も来ました。「大切なしんしょうだから」いつもことわりつけてきたその農家も近所にこれ以上迷惑をかけられないと、ついに春の初めに大きなかしの木を切りたおしてしまいました。そうするとつぎつぎに病人が出たり、おじいさんが亡くなるということが続きました。

どうもりゅうじん様がおこつたらしい。りゅうじん様は昔、屋敷の池に住んでいたのに、その池が埋め立てられて、行きどころに困ってかしの木に住み変えていたのです。そのかしの木がまた切り倒されたので「りゅうじん様のたたりだ」という話がひろまりました。ある夏の激しく夕立が降ったあと、かしの木の株に大きな蛇がどろをまいているのが見られたそうです。

●疫病神と鬼はらい（風習）

2月8日は、夜になると鬼が山から降りて来て、外に出してある下駄に判を押したり、履物を持っていってしまうといわれ、子どもたちは、この日は履物を全部家の中にかくしてしまい、外から鬼が入って来ないようにねぎやおがらしをいぶして戸口にさしたり、メザルを軒下につるしたりします。12月8日にも鬼や疫病神がこないようにヌキナシやメザルといわれるかごを竹の先などにつるします。その昔支那へ竹細工を習いに行った者が、りっぱな職人になり、日本へ帰る船の中で乗り合わせた男と話を交わしました。「日本へ行って皆んなを困らせてやるのだ」という疫病神だったので。そこで竹細工職人は「自分の家には来てくれるな」とたのみこみました。「お前の家に何か目印を作っておけばいかないでやるよ」といいました。そこで「わたくしは竹細工職人だから目印にヌキナシを作っ

いつの頃からかはわかりませんが、2月8日や12月8日は、^{こと}事八日^{ごと}といっ

て農家では軒先にヌキナシやメザルをつるすようになったということです。

